

北海道大学構内における出現鳥類の変動

○徳永珠未（北大野鳥研究会）・黒沢令子(北大地球環境科学研究科)

北海道大学は札幌市の都心部に位置しており、建物と樹林地、農場など様々な環境が交じり合った大きな緑地となっている。北大野鳥研究会は、構内におけるトンネル工事に伴い、工事前後の鳥類相の変化を観察する目的で1995年から北大構内におけるラインセンサスを開始した。以降、環境の変化で構内の鳥類層がどうなっていくかをモニタリングする目的で調査を継続している。

調査は1995年10月～1996年12月、1998年4月～1999年3月、2000年4月～2001年2月、2003年4月～2004年3月、2005年3月～現在とほぼ隔年で断続的に行われている。構内を北と南に分け、およそ2kmのセンサスルートを設定した。ルート内には建物と街路樹が並ぶ環境、樹林環境、農場など開けた環境が混在している。

ここでは ①通年(1998～2005)

②繁殖期(4～7月)、積雪期(12～2月)(1995～2005)

の2つに分けて、出現種と個体数を解析した。

1998～2005における総出現種数は40種前後で、毎月の平均個体数は200羽前後だった。繁殖期における出現個体数は32種ほどで、平均個体数は215羽前後だった。積雪期の出現種数は17種ほどで、平均個体数は115羽前後だった。1998年から2005年で総種数の大きな変動はなかったが、出現個体数は年によって変動が見られた(図1)。

発表では、出現した種のうち個体数が多い種の年次・季節変動について、また特に変動が目立つ種(ある年から見られるようになった、または見られなくなった種)の変化について考察する。

今回ラインセンサスのまとめをするにあたって、データの使用を快諾してくれた北大野鳥研究会の皆に感謝の意を申し上げる。

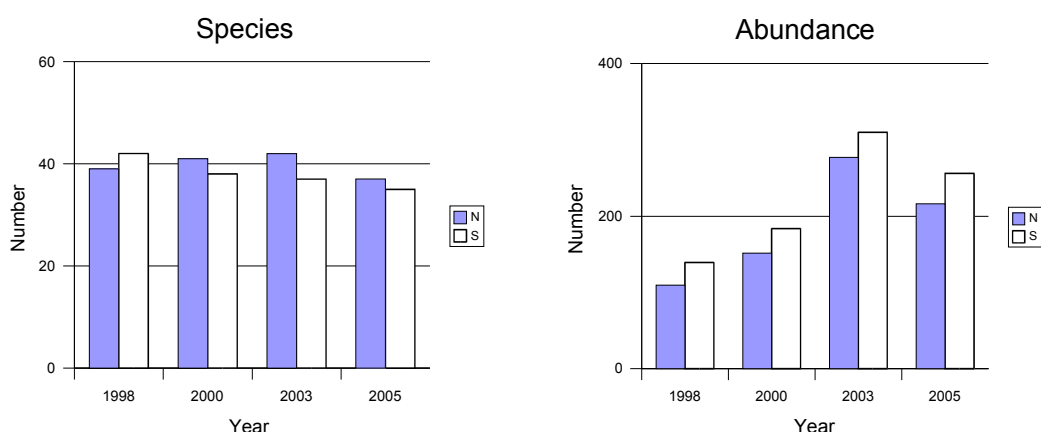


図1. 北大構内ラインセンサスにより、観察された種数と個体数(1998～2005年)。